第 2 回市史講座ミニレポート：令和元年 5 月 11 日（土）

「近世松江の女・男・子ども」

沢山美果子先生（岡山大学大学院客員研究員）

今回は、『松江市史』通史編「近世 II」の第七章「人々のくらし」（2019 年度刊行予定）を書いていただいた沢山先生の講演でした。

沢山先生は『松江市史』編纂に関わられて初めて松江市域、出雲についての史料に触れたと述べられました。かつ、先生が担当されたのは、庶民の日常の暮しを松江という歴史的現場で再現し、著述されることでしたので、それに値する文書・文献・資料を探し出すことの苦労も多かったようです。

これまで松江地域はじめ島根県下の地方史誌で、沢山先生の著述の視点で書かれたものはありませんでしたので、『松江市史』全 18 巻の中でも特色ある内容となりました。

今回の講演は、「人々のくらし」の中から、〈女と男そして子ども〉について地域に残された史料を重ね合わせて読み解き、そこから浮かぶ事例を史料の解説をされつつお話になりました。紹介された史料は「宗門関係史料」「奉公人帳」「日記」「褒賞記録」「出産・死亡記録」「民間療法」「もめごとの史料」「古絵図」などでした。中心テーマは、〈生きること〉でした。

日常的な命を中心にした女・男・子どものお話しとして、以下の三点を紹介されました。

（1）18 世紀半ばから人口は増加傾向。女子の出生数は男子の出生数より少ない（男子優先の人為的操作有りヵ）。
生育した女性の生存率は高い。この時期には 62 才以上の人口が村全体で占める比率が高くなっている。
（「宗門帳」から見えること）

（2）19 世紀前半から命への関心が高まる。「家」の存続・維持が重要な課題であり、そのための出産と成育の重要性
近世社会では女性が出産によって死亡する率は 4 人に 1 人。出生児 20%近くが 1 才未満で死亡、5 才までは 20～25%が死亡の実態。
命を守るために、民間療法・養生・療養・医者への関心が高くなる。成育儀礼（生後三日目、五日目、七夜、1 か月の宮参り、1 年の食い初めなど）による成長への願い。
（「出産・死亡記録」「民間療法」「日記」などから見えること）

（3）命の守る手段。乳をめぐるネットワーク
松江藩での上層武士家の「乳母」の供給手段は村々への半強制的要請による。その中、松江の町の御家中への「乳母」奉公を敬遠する「女」たち。捨子・行き倒れ人の命の保護と救援の仕方
（「御用留」の御触書の記述で見えること）

また、非日常的な出来事として、以下の三点の事例を紹介されました。

（4）村という共同体を維持するため、それを乱す行状をした女が村から追放される事態で、

夫にも管理監督責任の欠如があったとして戸締めの刑に処せられた出来事

（「御用留」のお触れ書きから）

（5）女にとって日常的で、あえて残そうとしないし、残ることもなかった出来事を男の視点から見て書き残したこと

月経のこと、男として驚き畏れた女の言葉などの事例

（新屋太助の「大保恵日記」の記述から）

（6）「遊所」の女達は性の商品として売買される位置であったこと

遊女の逃亡・心中・折檻を記録した男の記述から知る事が出来る。

「家」の女、主人家の「女」、近所の「女」など日常的存在として生活する「女」と区別し、「家」と「遊所」を行き来する男の二重規範の心理

（新屋太助の「大保恵日記」の記述から）

最後に、「ジェンダーの視点の重要性」を述べられ、これまでの歴史学はひとが何をしたかに関心を集中させ、どのように生きたかをほぼ見過ごしてきた。したことに主眼を置くと男の事蹟が叙述され、女は総体的に排除されていた。しかし、「生」（生きること）の主題化という歴史学の転換にあたって、女性史はその先頭走者となっている、という論を『鹿野政直思想史論集』より紹介して締めくくられました。